

「船」の効果についての参加青年の声

(第38回「東南アジア青年の船」事業参加青年レポート集 抜粋)

私は今回東南アジア青年の船に参加して、留学やその他の国際交流事業と比較して、密度の濃い、充実した事業であったと率直に思った。この事業の中で最も有益であると感じたもの、それは「ASEANの本質を知り、ASEANについて深く考える機会」である。

11カ国の青年が共同生活をしているので、船内はちょっとした世界の縮図です。この船内ディスカッションが仮に国際会議の場だとしたらどうなるでしょうか。失敗したら恥ずかしいから、分からないからという理由で発言を控えてしまえば、私が参加している意味はなくなります。各船内活動を通して、国際社会における日本人の弱点を身をもって理解することができました。

私も失敗しながらではありましたが、海外青年に混ざって発言する度胸と国際社会の中で生きる感覚を体験することが出来ました。

これほど親密な関係になれたのは、船内での共同生活という特殊な環境下にいた結果でもある。3人の関係はこのSSEAYPでしか作れないかけがえのないものだ。これからも一生の付き合いになる。2人の存在を、2人とのつながりを大切に生きていきたい。

自を魅せ、異を知る方法を学んだということ。いかに自分とは異なったものや違いを受け入れ、いかに自分や自文化を相手に魅せるか。船の上という、文化や宗教、考え方の異なった人々と共同生活をしなければならぬ環境だからこそ得ることの出来た学びであったと思う。

フィリピンでも、ブルネイでも、日本という国の偉大さを実感し、日本の文化や社会をいい意味で誇りに思うようになった。普通の旅行や留学ならこの段階で終わったのだろう。でも船内で共同生活をするうちに、元気な外国参加青年達が大好きになっていった。

船上というある種隔離された状況で、短時間で、ASEAN の青年たちとの交流の中で体験できるのは本事業ならではだと思えます。そしてそのような特別な環境だからこそ、自分の学びも強く印象に残るのではないかと考えます。

一つ一つの企画活動準備にさける時間と船内にある物資が十分とは言えない中で活動していくことは、私には想像以上にハードなことでした。そのような忙しい環境の中で企画を成功させるためには、会議中に決めるべき事を短時間で形にするための意思決定、そして短時間で意思決定するためのメンバーの事前準備が不可欠だったと感じます。

(第37回「東南アジア青年の船」事業参加青年レポート集 抜粋)

良くも悪くも、長い間限られた空間で生活をしていればいろいろな経験をすることになる。それらすべての事項に関して、参加青年たちは真正面から向き合い、懸命に理解しようと努める。このような環境に身を置くことで互いの深い信頼関係が結べたと思う。

実際に船に乗ってみると、まさにそこは多文化共生でした、お互い言葉や慣習が違う、育った環境が違う、時に戸惑ったり、驚いたりすることもありました。それでも心と心は必ず通じ合います。「違い」があるのは当然であり、その違いを認め合うことからはじめることによって相手の心を開かせることができました。ASEAN 各国の人々と活動を共にする中で何気なく交わした会話こそがもしかすると対話だったといえると思います。疑問に思った事を尋ねあったり、日本との違いについて話し合いました。時には家族の話や万国共通の恋愛の話題について語るなどしました。これらの時間こそが私にとって貴重な瞬間でした。

ふじ丸に11カ国から集った仲間は国境や文化、宗教、年齢、性別など何か特別難しいことを気にすることなく自然と家族になったと私は感じています。きっとそれは本当はとても奇跡的なことなのかもしれません。確かにディスカッショングループなど全体のプログラムで政治的な話などセンシティブな話題にはふれにくかったこともあったからです。

しかし、どこの国でもないふじ丸の上で生活を共にするという特別な環境と、フレキシブルなただの青年たちであった私たちがそれを可能にしたのだと思います。

各国のショッピングモールはどこも本当に同じようなつくりで、同じようなものが売られていました。しかし、この事業のホームステイや船上での共同生活において、東南アジアの青年やホストファミリーと同じ食卓について、同じ部屋で語り明かして、ともにプレゼンを作って、そして、肩を組んで歌を歌うことを通して得られたASEANの国や人々に対する理解は、観光では絶対に得られないほど深いもので、私はすっかり魅了されました。

「東南アジア青年の船」を終えての率直な感想は、海外の青年たちとのこれほど中身の濃い交流活動はこれからの人生でもう決して経験することはできないだろうなということである。私は大学時代から海外に興味を持ち、カナダへの留学や、海外でボランティア活動等を行ってきたが、今回ほど他国の文化、慣習、国民性、宗教を学び、自分自身が彼らの国々と日本との違いについて考えさせられる機会はなかったと思う。また同時に、日本という国を外から客観的に見ることができる場でもあった。そのような貴重な経験ができた理由として、やはり、24時間各国の青年たちと活動や寝食を共にしたことが一番の理由だと思う。

国も宗教も年齢も異なるが、ふじ丸という閉ざされた空間の中だからこそ、常に共に生活することでどんどん仲が深まったと思う。また、常に普段の生活とは切り離されたような空間だから、嘘もつけないし、一人ひとりがよく分かり必然的にとても深い付き合いができる。一緒にこの盛りだくさんのスケジュールを、時に真剣に、時に笑いながら取り組んできたことで強い連帯感が生まれる。特に多くの時間を過ごしたソリダリティグループやディスカッショングループのメンバー、眠い目をこすりながらも、くだらない話から自分の国の話までたくさんのお話をしたキャビンメイトとは強い繋がりを持つことができたと思う。

「船」の効果についての参加青年の声

第24回『世界青年の船 参加青年レポート集』より一部抜粋

決められたルールを変更するために立ちあがるリーダーシップを発揮した参加青年、どんなことでも楽しみに変えいつも笑っている参加青年、彼等を見ることで今まで気付かなかった私自身の至らない点が浮き彫りになりました。これは、異なる背景を持つ青年と船という閉鎖空間の中で向き合うことでしかなされなかったと思います。

私達が過ごした船という空間においては、外界と途絶した閉鎖空間であるが故に、ほんの些細な出来事が一大事のように感じられます。また、当然プライバシーのレベルも下がり、300人近い参加青年たちが共同生活を送る船内には、一人ひとりの喜怒哀楽が充満しているようでした。こうした環境の中で十分なコミュニケーションをとっていくため、仲間の感情や考えに想像力を働かせそれらを受け入れようとする、互いに最適な距離感を掴み双方が納得のいくアイデアを出し合っていくことが、日常生活以上に必要とされていたのです。

実際に乗船して感じたことは、「船とは外部との連絡が一切遮断された空間であり、24時間常に誰かが一緒にいてくれる空間である」ということでした。普段ならば何か逃げたいことがあればどこか別の場所に行ったり、インターネットの世界に浸ってみたり……。今まではそうやって辛いことから逃避していました。しかし船内では今までの逃避手段に逃げることはできず、自分の出来ないことや駄目な自分をまざまざと見詰め直さずにはいられないのです。逃避癖のある私には泣くほど辛い時期もありました。しかし、そんな時に励ましてくれ、笑顔で支えてくれ、アドバイスをくれたのは13カ国のファミリーメンバーでした。技術が発達して世界中と簡単に連絡がとれ、飛行機や新幹線により短時間で移動が可能な現代において、約1カ月、24時間同じ空間で過ごす船は生身の人間同士がぶつかり合い、理解しあう、船でしかあり得ない人間臭い結びつきが生まれる場所だと思います。また5大陸から集まった13カ国という国籍を超えた人が集まった、船という空間だからこそ些細なことからも様々な文化や考え方に触れ、自分自身と向き合うことができたのだ

と思います。

世界青年の船事業に参加して経験し、成長できたことは、今まで受身に過ごしてきた自分を変えられたことです。ふじ丸という限られた空間の中で相手から逃げずに真正面から異文化コミュニケーションをじかに体験し、その結果自分の中でどっしりと構えるド根性を備えることができ、何度も話しあうという姿勢が身についたと思います。

活動の様々な場面で世界船が多くの方の支えによって成り立っている事業であることも実感しました。特に寄港地活動における事後活動組織 SWYAA の方々の支援は非常に手厚く、既参加国における SWYAA の活動の役割の大きさや意義を、身を以て感じました。さらに訪問国での VIP 待遇や船上レセプションで各国の大使や訪問国の要人などたくさんの来賓の方によって、改めて自分たちが日本やその他各国の青年を代表して訪問活動を行っていることを実感するとともに、自分たちがこれから担っていく責任と期待の重さを再認識しました。

海の上に浮かぶ船の中で協力しあいながらみんなが協調して住めるような素敵な場所を作っていくこの環境は正に「異空間」です。船全体の雰囲気や気を遣うことはもちろん、特に自分のキャビンメイトたちとも共同生活していかななくてははいけません。毎日を皆と過ごすことによって本当に「家族」と呼び合えるほどの絆ができました。

約 1 ヶ月半のプログラムを終えて感じるのは、SWY プログラムが各参加者に与えるインパクトの大きさです。与えられた空間の中でいくらでも自由にでき、且つその空間は世界の縮図であることが、英語や文化の壁に衝突しつつも自分の興味の赴くままに学べる環境を創りだしているのだと思います。そしてそれは船の上の共同生活にある意味「強いられる」SWY でしかできません。

船という閉鎖的空間で、衣食住をともにすることにより、SWY ワールドが作られます。何かやろうとしたとき、受け入れてくれる空間がそこにはありました。全ての人の意見を尊重し、間違ふことは決して恥ずか

しくない世界です。13の国の意見が一度に聞くことができる機会となるのがSWYでした。

SWYと留学には決定的な違いがありますが、それは生活の「密度」と人間関係の「親密性」であると思います。このような文化の違いというのが多く混在している中、逃げ場のない船上で1カ月以上もの間、ディスカッションや自主活動などの内容の濃いスケジュールをこなし、共同生活を送るといえるのはSWYにしかない魅力だと思います。ここで学ぶものや人との出会いは、普段の生活では絶対に得られないものであり、自分にとっては人生を変える経験になりました。また、SWYでは自分たちが自主的に作っていく活動や多くの発言の場面など、日本での生活ではなかなか得られない貴重な機会を得ることができます。私はその貴重な機会を生かして、今まで知らなかった自分の新たな面に気付くことができました。

留学経験や海外一人旅、また日本の日常生活でも外国人と接する機会が多くあり、慣れていたつもりでしたが、これほど濃密な時間を過ごすことができたのは船上という特殊な環境で共に過ごし、お互いを尊重する空間があったからだと思います。船内では常に様々な活動が行われポジティブなエネルギーに包まれていて特別なものでした。

世界船の環境は非常に特殊でした。インターネットが使えず、外部との連絡がとれない、そういった環境は私たち参加青年の絆をより強固にする要因の一つであったように思います。私たち参加青年はみんなが自主活動を企画、参加することを通じて自国や海外の文化や伝統を体験し、文化の多様性を改めて感じる機会となりました。

船ではプライバシーの空間が少なく、宿泊部屋で外国青年との共同生活を送らなければなりません。心の休まる時間があまりない環境で、どう自分を異文化に適應させ、かつ自分の軸を保っていくかが問われます。こういった精神的疲労・苦痛を体験する過程を踏んで初めて、異文化理解が達成されることに一歩近づくと私は考えます。